

写真2 学園祭で学生がフレカードで集客



図1 SGE♥プロジェクトのロゴマーク

な発想のもとイキイキと活動ができるよう、コンセプトを「楽しい！婦人科検診啓発プロジェクト」とし、学生の発案で名称を「SGE♥プロジェクト」と命名(表)。旗印となるロゴマーク(図1)も、

本プロジェクトに賛同したデザイナーに作成いただいた。大学とのコラボが周知されさらに市とのコラボに発展

以下にこれまでにを行った活動の一例を紹介する。

①本プロジェクトメンバーによる学生向け出張授業

本プロジェクトメンバーの看護スタッフから「これからの予防医療を担う学生に、正しい予防医療の情報と、綺麗事だけではなく苦労した事例も含め現場の生の声を伝えたい」との意見が挙がり、授業の一環として看護学部の全学生650人に対し、看護スタッフによる出張授業を実施した。

授業には、スライドやスタッフ自作のリーフレットを用いて、がん発生のメカニズムやがん検診受診率の低迷などの課題、実際の受診風景や受診の方法など、幅広い内容の授業を実施し、終了後にアンケート聴取も行った。

アンケートはほぼすべての学生が記入、「看護学生として、子宮頸がんや乳がんが罹患される方が少しでも少なくなるように、検診の大切さを伝えていきたい」と

いったコメントが見られた。また男子学生からも、「子宮頸がんについて知るとは、男性にも等しく大切なことと感じた。今日知ったことを周囲に伝えていきたい」などの意見が聞かれ、婦人科検診を自分事として捉えた前向きな意見を多く聞くことができた。

②学園祭「聖灯祭」における婦人科検診啓発ブースの出演

19年11月、大学で開催された学園祭「聖灯祭」内にて婦人科検診啓発ブースを設置、当センタースタッフと10人以上の学生メンバーが啓発活動に参加した。学生は、手づくりのフレカードを用いて集客を行いながら(写真2)、ブースでは子宮頸がん検診で使用する機器や乳がん触診モデルを用いて検査方法や検診の重要性を説明した。近隣に所在する婦人科関連クリニックをまとめた資料も掲示し、医療機関の情報提供などを行った。

当日は大学生だけでなく家族連れや中高生なども数多く来場しており、200人を超える幅広い年齢の住民に検診の重要性を理解してもらった機会となった。

今年度は大学側から「学園祭が

コロナの影響でWEB開催となった」と連絡があり残念に感じていたところ、「代わりに学生メンバーで検診センターの婦人科エリアを使ってがん検診啓発動画を撮影し、WEB開催の学園祭やYouTubeで配信したい」という提案をいただいた。その場で快諾し、撮影当日は大学の卒業生でもある当事業部のメンバーも加わり、皆イキイキとした笑顔で動画を撮影していたのが印象的であった。

学生自らが発案・企画し、同世代に情報を発信する取り組みは、私たちだけではなし得ないことであり、大変貴重な経験であった。

③人間ドック健康食の開発

当センターでは、「おいしく楽しく学べる食育レストラン」をコンセプトとして、人間ドックでの食事体験を日頃の食生活を振り返るチャンスと位置づけ、受診された方に対し管理栄養士が監修した健康食の提供を行っている。今回、がんに対する免疫力を高めるため、がんに対しても重要な要素であると考え、20年の夏メニューについて、学生メンバーと共同開発を行った。

共同開発の依頼の際は、「野菜

コロナ禍における
エンゲージメント
向上の取り組み

コロナ禍で求められる、
患者・利用者とスタッフの
エンゲージメント向上を考える。

産官学連携モデルを通じた
エンゲージメント向上の施策

池田孝行 ●(社福)聖隷福祉事業団 保健事業部 総合企画室室長兼聖隷予防検診センター事務長/医療経営士2級

職員エンゲージメントの向上は管理者の重要なテーマであり、そのためには職員の「やりたいこと」「やるべきこと」「やれること」の3つが揃う部分を広げていくことが重要である。しかしながら、地域への貢献・事業の拡大・職員エンゲージメント向上のすべてを同時に達成することは、このコロナ禍においては特に困難を極めるミッションである。

今回は、そのような状況のなかにおいて、小さい取り組みながらも地域への貢献・事業の拡大・職員エンゲージメント向上のすべてを同時に達成することができた「産官学連携モデルを通じたがん検診啓発の活動事例」についてお示ししたい。

婦人科検診啓発に向けた学生参加型プロジェクト

私が所属する聖隷予防検診センター(浜松市北区)では、以前から医師も含めた女性スタッフを中心とする「女性検診推進プロジェクト」を立ち上げ、主に地域住民に向けた婦人科検診の啓発活動を推進してきた。

近年、婦人科系のがんの罹患数

や死亡者数は増加傾向にある。乳がんは40歳代後半以降、子宮頸がんは成人以降に罹患数が急増するが、その現状はあまり広く知られていない。特に若い世代においては、市町村が無料クーポンを配布しているにもかかわらず、受診率の低迷が報告されている。今回、当事業団が取り組みを推進しているSDGsで掲げられている目標の一つである「予防や治療を通じた非感染性疾患による若年死亡率の低減」を目指し、AYA世代(15歳から39歳の思春期・若年成人)を主なターゲットとして、受診率向上へつながる取り組みを検討した。

取り組みにあたって、まず、A



写真1 キックオフミーティングの様相

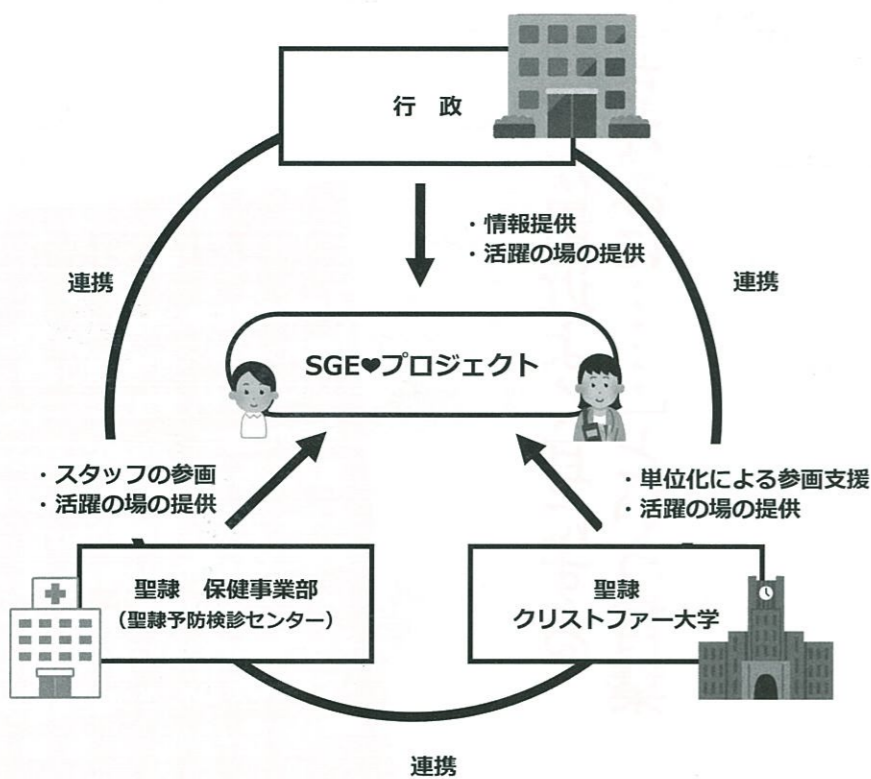
表 プロジェクト名の由来

S	seirei (聖隷)
G	gynecology (婦人科)
E	enlightenment (啓発)
に対して	
♥	(愛)を持って活動する

YA世代に相当する住民に「なぜ検診によるがんの早期発見が重要なのか」を自分事として認識してもらう必要があると考えた。そこで2019年10月、当センタースタッフおよび近隣に所在する聖隷クリストファー大学看護学部の学生を中心に婦人科検診啓発プロジェクトを発足、同大学と当センターがその活動を支援する学生参加型モデルを構築した(写真1)。

プロジェクト構築時にはコンセプトの明確化と、単発でなく継続した仕組みを構築することを念頭に置いた。後者については、メンバーの卒業によって自然解散しないようにとの思いからだ。さらに、学生の負担が少なく、そして自由

図2 SGE♥プロジェクトの概念図



たアプリなどを共同開発できないかとの相談もいただいております。本プロジェクトのさらなる広がりが期待される。当センターが所在する浜松市は、「予防・健康都市」をコンセプトに「市民が病気を未然に予防し、いつまでも健康で幸

せに暮らすことができる持続可能な都市」という新たな都市像を掲げ、市民の健康寿命の延伸の実現に向け、官民を挙げたさまざまな取り組みが行われている。その舞台に、さらに「学」という将来を担う若いDNAが参画すること



写真3 人間ドック健康食の開発メンバーの集合写真 (ZOOM画面の前で)

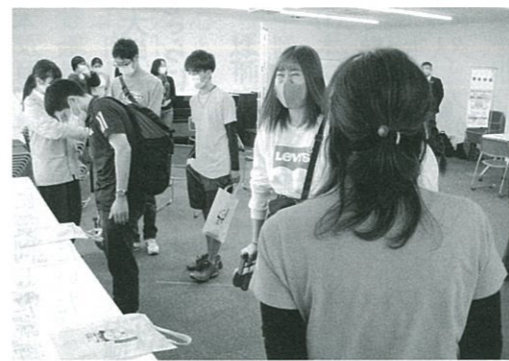


写真4 がん検診啓発活動の様相 (運動体験)

を多め・減塩・脂質を控えた健康的な食事を考案してほしい」とだけ伝えた。しかし、実際に学生が考案したメニュー案は、食欲アップにつながるように見た目を意識し、季節を感じさせる夏食材(ナスやカジキマグロ)を取り入れ、さらに食べやすくあなかけにし、健康を意識した薄味で……という、将来は調理師が管理栄養士を目指しているのかと感じるくらいに配慮された、スタッフも驚くメニューであった。提案されたメニューは若干のアレンジを行った後、6〜9月の間に人間ドックを利用された4000人を超える方々に召し上がっていただいた。

コロナの影響により、大学側および学生メンバーとの打ち合わせは、ほぼすべてZOOMでの実施となった(写真3)が、学生メンバーからは「自分が考えた献立が形になり、実際に提供される貴重な体験ができた」「以前に学習した栄養学と、現在学習している生化学の知識を活かしたメニューが考案できた」などの意見が挙がった。

また、実際に喫食した利用者からも「学生の思いとアイデアが伝わるおいしい食事だった」「ぜひレシピを教えてください」など、200件以上の温かい応援メッセージをいただくことができた。

この取り組みは地元メディアでも取り上げられ、本プロジェクトが広く周知される一因となった。

④行政とのコラボによるがん検診啓発活動

8月には浜松市のがん検診担当者の方から「コロナの影響によりがん検診の受診率が昨年対比で3割減となっている」との報告があった。報道などを通じて本プロジェクトを理解していた担当者から、「市民に向けたがん検診受診啓発イベントをコラボして実施できないか」との提案を受け、10〜11月の間に計3回、市内のドラッグストアにてがん検診の啓発活動を実施した。

市の管理栄養士や当センターのスタッフとともに、学生メンバーも万全なコロナ対策をとりながら運動体験や健康相談、がん検診の予約に対する支援などを積極的にを行い、盛況のうちに終わることができた。こうした啓発イベントには通常あまり関心を示さないAY世代の利用者も多く立ち寄ってくれた(写真4)。学生メンバーとともに実社会の場でさまざまな体験ができたことは、私たちにとっても大きな収穫になった。

プロジェクトを通じてスタッフも手ごたえを感じる

本プロジェクトに参画した当センターの多くのスタッフは、確かな手ごたえを感じているようだ。実際に、「将来、医療に従事することを希望する学生とともに、地域の課題を踏まえたがん検診啓発活動と一緒に進めたことは、今後の予防医療の視点だけでなく、私たち医療従事者にとっても大変有意義な機会である」「学生とのやり取りを通じて『なぜ私がこの仕事を選んだか』を再認識する非常に良い機会となった」といった意見が挙がっている。

大学側からも高い評価を受けており、本プロジェクトは20年度から、学習と地域への貢献とを結びつけた課題の探求・解決を目的とした「地域実践アクティブラーニング」として単位化された。今後、教育機関との連携については、近隣の医療系大学や看護・医療技術大学などに同様の取り組みの提案を行う予定としている。

また浜松市からは、地域の企業と本プロジェクトが連携し、若い世代へのがん検診啓発を目的とし

は、大変有意義かつ未来につながることも、学生に将来「この地域で一緒に予防医療を行いたい」と思ってもらえるきっかけになると考えている。

コロナ禍においてもともに共感・共創できる未来へ

医療経営という視点において、このような取り組み自体が近視的な利潤を生み出すことは考えにくい。しかしながら、将来この地域を担うであろう若い世代が、地域住民と共通の課題を理解したうえで自発的に解決を目指していく姿は、以前国が「保健医療2035」で示した「そこに住む人々が主体的に参加し、自律的に運営される持続的な保健医療システムの構築」や、SDGsが掲げる複数の目標にも合致し、それが私たちも含むこの社会的長期的利益につながっていくと考える。

コロナ禍で感染の防止が優先され、対面での活動が制限される環境においても、私たちにできることは多い。「やりたいこと」「やるべきこと」「やれること」を踏まえ、さまざまな地域の資源とともに課題を共有し共感を生む。そしてお



Profile

いけだ たかゆき ● 大学卒業後、プライダル事業を展開する企業に就職。プランナーを経て、本店総支配人に就任するも、自身の入院を機に健診事業に興味を持つようになり、2006年、聖隷福祉事業団保健事業部企画課に入職。企画開発室室長を経て、13年、聖隷佐倉市民病院健診センター事務長。病院事務次長の兼務を経て、17年より現職。ヘルスケア経営学院「医療経営士実践研究講座」にて講師を務める。医療経営士2級

互いが手を取り合って「共創」することで、職員エンゲージメント向上のみならず地域愛に通じる地域のエンゲージメントの向上にも寄与し、ひいては、この地域の健康寿命の延伸につながることでできると確信している。

最後に、この取り組みに対し温かく支援いただいている浜松市および聖隷クリストファー大学の若杉、氏原、村松先生、そして現在は豊橋創造大学にて教鞭をとられている鈴木知代先生、プロジェクトメンバーおよび本プロジェクトを支えていただいているすべての方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。